

「小さな一歩をふみ出す」

12月2日に行われる「22ヒューマンライツメッセ」で、小学生から大学生までの5人が人権問題に関する意見を発表します。その中から、鳴門市第二中学校3年 深山 寛子さんの意見発表を紹介します。

「人権」この言葉を聞くと、私は「部落差別」のことがまず第一に思い浮かびます。部落差別は、私が小学校5年生から現在中学校3年生までの約5年間、道徳の授業で学んできました。部落差別を受けた人にお話を聞いたり、実際に識字学級に行ったりもしました。そんな中で、特に記憶に残っている言葉がいくつかあります。

一つ目は、識字学級に通うおばあさんの言葉です。「子どもの時、学校に行こうと思っても、家の手伝いで行けなかった。行ける日があっても、クラスの子に道を通せんばされたり、石を投げつけられたりして行けなかったんじゃ。」それは、私の想像をはるかに超えた現実で、衝撃でした。学校に行きたくても行けなかったということは、以前から聞いていましたが、同級生から通せんばをされ、石を投げつけられるという光景のあまりの痛ましさに、心がつぶされそうな気持ちになりました。もし、自分がそんな目にあったらと考えただけでも怖くなりましたが、

その一方で、小さな小さな小学生の女の子の心にどれだけの悲しみを負わせたのかと思うと、私の中に、怒りの感情がこみあげてきました。そして、部落差別がこんなにも人を苦しめていたことも知らずに、「差別はだめだ。」「差別を無くすためにどうしたらいいのかわ。」と、ただくりかえしてきただけの自分が悔しくなりました。

二つ目は、自分の生まれた地域を知られると、就職も結婚もできなかった。ほなけん、みーんな、隠して生活しよったんよ。」という女性の言葉です。部落差別が、どれだけたくさんの人々の生活を、重く、暗く、おびやかしてきたのでしょうか。どんなに仲が良くても、ある日突然避けられるかもしれないという恐怖に、毎日おびえて生活しなければならないのです。また、自分の大切な人にまでも隠し事をするという辛さもあったはずですが、そんな思いをしてまでも、どうしても隠さなければいけない。なぜなのか…。それは、もちろん、差別をされてしまうからです。



鳴門市第二中学校3年
深山 寛子さん

私は、これまでずっと、差別をする人間にはなりたくないと強く願ってきました。そして、自分は差別をしてきではない。とも思ってきました。部落差別で悲しむ人がいるのは、差別をする人がいて、心無い人が存在するからだと思ってきました。けれども、先日

の道徳の授業で「はじめの『空気』」について考えた時、もしかすると、部落差別を許してしまっているのは「私自身」なのかもしれないと、気付きました。道徳の授業で、いじめが起きている時、いじめている本人でさえも、はじめの「空気」によって動かされてしまふと、友達が話していました。いじめの「空気」とは、おそらく多くの人が体験したことのある、あの重くて、暗くて、冷たくて、悲しい、ピリついた「空気」のことです。例えば、友達が誰かの悪口を言っていた時に、ひとりだけ「違う」とは言いにくい「空気」が流れています。結果、誰も反論できず口を閉ざしてしまいます。あの重い空気を、教室の中で、私も無意識のうちに作り

出していたことに、はっとしました。そして、この「空気」こそが、差別の芽であり、部落差別を許してしまう空気を社会につくっていることに、気付きました。直接石を投げつけたり結婚を反対したりしなくても、部落差別がなくならないのは、石を投げつける人間を見逃し、結婚を反対しなくても「空気」を作っている「私たち」なのです。このことを多くの人たちが自覚しなければ、まだまだ部落差別解消には、つながっていかないのではないのでしょうか。

部落差別はたくさんの方の幸せを奪います。自由、笑顔、夢、自分らしさ…。いくら挙げてても終わりが無いほどです。実際にお話をしてくださった人の中には、涙ぐむ方もいました。部落差別は、心に一生消えない傷を残します。私は、そんな部落差別を無くしたいと心から願います。そのために、これからも差別について正しく学び、仲間と一緒に考え、間違いを正していくことができる力を身に付けていきたいと考えます。そして、その一歩を踏み出す勇気を、いつも心にともしていきたいと思います。「一人の百歩よりも、百人の一歩」のように、一人ではなく、多くの人が差別を無くす努力をすれば、必ず明るい未来がやってくると思います。大きくなくていい。あの「空気」に負けず、差別を見逃さず、自分にできることから行動に移していこうと、私は心に誓います。